



Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金
「特定領域研究」
Newsletter No. 18
〈研究総括号〉

2010年2月号



はじめに

平成 17 年度に発足した本特定領域研究は、15 にのぼる多彩な研究班の融合的連携を通してシリア国北東部ユーフラテス河中流域ビシュリ山系で総合調査を推進し、同地の先史社会が定住社会を経て古代都市社会へ発展した経緯と、定住社会出現のなかでセム系の部族社会が形成され、発展した経緯を解明することをめざしています。

しかし、本研究発足後の 2 年間近くはシリア当局による調査許可がおりず、シリア現地における連携研究は大幅に遅れてしまいました。

とはいえ、この間にも国内・外における背景研究・関連研究は着実に推進されました。

そして、シリア現地調査の許可を獲得した平成 19 年 3 月以後の研究進展にはめざましいものがあります。13 次にわたる現地調査を実施し、昨年 11 月には国際シンポジウム“Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria”を開催しました。

このシンポジウムでは、5 年にわたって蓄積してきた研究の成果を海外の先学に問い、高い評価を受け、今後の研究のあり方に関する有益な情報を得ました。

国内・外での関連研究にも、シリア現地調査出土資料の分析は言うまでもなく、複数研究班の共催によるシンポジウムの実施や出版など、大きな成果があります。

ニューズレターも本号が最終号です。5 年間の研究活動を振り返ることで本研究を総括したいと思います。

最後まで連携研究に尽力され、本号に執筆された研究代表者各位に心からお礼申し上げます。

平成 22 年 2 月 20 日
領域代表者 大沼克彦

目次

総括班「総合的研究手法による西アジア考古学」	大沼克彦	1
計画研究「西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」	佐藤宏之	3
計画研究「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」	西秋良宏	5
計画研究「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」	藤井純夫	7
計画研究「西アジアにおける都市化過程の研究」	常木 晃	9
計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」	沼本宏俊	11
計画研究「〈シュメール文字文明〉の成立と展開」	前川和也	13
計画研究「環境地質学、環境化学、 ¹⁴ C年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」	星野光雄	15
計画研究「西アジア先史時代から都市文明社会への生業基盤の変化に関する動物・植物考古学的研究」	本郷一美	17
計画研究「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」	岡田保良	19
計画研究「オアシス都市パルミラにおけるビシュリ山系セム系部族文化の基層構造と再編」	宮下佐江子	21
公募研究「人類学・歴史学によるアラブ系部族組織再考」	赤堀雅幸	23

表紙

A
B|C

A: ガーネム・アリ遺跡とビシュリ砂漠台地の崖線 (ガーネム・アリ遺跡の左側部分には発掘トレンチが、崖線のやや右寄り部分には突出したテル・シャブート墳丘墓がみえる)

B: ワディ・ダバ墓地C地点のシャフト部 (平らな石膏石で塞がれていた)

C: ワディ・ダバ墓地C地点の墓室内で出土した土器

総括班「総合的研究手法による西アジア考古学」

大沼克彦

1. 研究組織

研究代表者

大沼克彦 (国士舘大学イラク古代文化研究所教授・領域の総括)

連携研究者

藤井純夫 (金沢大学人間社会研究域教授・研究進行状況の調整)

西秋良宏 (東京大学総合研究博物館教授・シンポジウムの開催)

常木 晃 (筑波大学大学院人文社会科学部研究科教授・研究発表会の開催)

宮下佐江子 (古代オリエント博物館研究部学芸課長・広報活動の推進)

佐藤宏之 (東京大学大学院人文社会系研究科教授・教育プログラムの推進)

2. 研究の目的

アッシリアやバビロニアなど、西アジア古代王国の創建集団セム系アモリ人の一大原郷とされているシリア国北東部ユーフラテス河中流域ビシュリ山系で総合調査をおこなう本研究領域は、多彩な研究分野の融合的連携を通して同地の自然と文化の変遷を解明し、同地の先史社会が定住社会を経て古代都市社会へ発展した経緯と、定住社会の出現のなかでセム系部族社会が形成された経緯を解明することを目的とする。

本研究領域はまた、遊牧部族社会の流入と離脱を不断に繰り返してきた西アジア地方の都市的村落の歴史的特性を解明し、「セム系部族社会」が形成された経緯を通時的に解明する。

総括班は以上の研究目的を達成するため、研究領域全体の研究方向を調整し、連携研究を促進する。

3. 研究の方法

シリアにおける現地研究と国内・外における関連研究を促進する。現地研究では先ず遺跡の分布調査をおこない、遺跡の年代と分布状況を解明する。次いで、分布調査の成果に基づき、本研究領域の全体課題を解明するために格好な複数遺跡を選択して発

掘調査を実施する。発掘調査には、遺物、遺構、動物骨、土壌、地形・地質などを研究する自然科学研究班も合流する。最終年度には、それまでに蓄積された発掘・調査成果を踏まえた総括的な研究と補足的な研究をシリア現地で実施する。国内・外における関連研究はシリア現地調査と併行して実施する。

4. 2005 - 2009 年度の研究概要

総括班は、2005 - 2009 年度のいずれにおいても本研究領域の研究方向を調整するため、総括班会議、研究代表者会議を定期的で開催した。領域全体の研究成果を迅速に公表するためのホームページを頻繁に更新し、報告書、ニューズレターを定期的な出版した。研究会、講演会、シンポジウムを通して研究を蓄積した。シリア現地調査の許可を得た2007年3月以降は、13度の現地調査を統括的に促進した。総括班はまた、本研究に参加した大学院生等の若手研究者に研究成果の発表を奨励し、当該研究の第一線研究者に育成するようにつとめている。

平成19年3月24日に開催した総括班主催外部評価と平成19年9月25日の中間評価以後は、評価で指摘された要改善問題点を真摯に受け止め、それらの改善に向けて尽力した。

5. 主な研究成果

本研究領域の全体課題の解明へ向けた総合的研究を統括的に促進した。そして、ユーフラテス河流域の村落遺跡・ガーネム・アル＝アリ遺跡と直近の墓遺跡群がビシュリ砂漠台地ビシュリ山北縁ケルン墓群と異なる年代であることを解明した。

このことから、本研究領域では「新石器時代における定住化以後に農耕と家畜飼育の両者を同時に生業としていた(アモリ人?) 集団内部の農耕生業(ユーフラテス河流域の村落遺跡)と遊牧生業(ビシュリ砂漠台地)への二分化: 青銅器時代以前) → 農耕生業と遊牧生業の再統合(ユーフラテス河流域の村落遺跡: 前期青銅器時代) → 農耕生業(ユーフラテス河流域の村落遺跡)と遊牧生業(ビシュリ砂漠台地)への二分化: 中期青銅器時代) → 農耕生業と遊牧生業の再

統合（ユーフラテス河流域の村落遺跡）→・・・』というアモリ集団の構造変遷の図式をとらえつつある。

6. 「セム系部族社会の形成」研究への具体的寄与

総括班は各研究項目を調整し、本研究領域全体の連携研究を以下のように促進した。

シリア現地調査における連携

第1次（平成19年2月～3月）

総括班、研究項目 A01、研究項目 A02、研究項目 A03、研究項目 A04、研究項目 A05

第2次（平成19年4月～5月）

総括班、研究項目 A01、研究項目 A03、研究項目 A04

第3次（平成19年7月～8月）

総括班、研究項目 A01、研究項目 A03、研究項目 A04、研究項目 A05、公募研究（「北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究」）

第4次（平成19年11月～12月）

総括班、研究項目 A01、研究項目 A02、研究項目 A03、研究項目 A04

第5次（平成20年3月）

総括班、研究項目 A01、研究項目 A03

第6次（平成20年4月～6月）

総括班、研究項目 A01、研究項目 A03

第7次（平成20年10月～12月）

総括班、研究項目 A01、研究項目 A03、研究項目 A04、公募研究（「人類学・歴史学によるアラブ系部族組織再考」）

第8次（平成21年2月～4月）

総括班、研究項目 A01、研究項目 A02、研究項目

A03、公募研究（「人類学・歴史学によるアラブ系部族組織再考」）

第9次（平成21年5月～6月）

総括班、研究項目 A01、研究項目 A03

第10次（平成21年7月～9月）

総括班、研究項目 A01、研究項目 A03

第11次（平成21年10月）

研究項目 A01

第12次（平成21年11月）

研究項目 A03

第13次（平成21年12月）

研究項目 A04

国内・外での関連研究における連携

- ・発掘で出土した動物骨と種子の研究および動物家畜化過程と農耕・牧畜技術発達過程の研究
- ・発掘で出土した人骨の形質人類学的研究
- ・発掘で出土した試料のC14年代測定と岩石・鉱物試料の同定研究
- ・古代文字資料にあらわれる動植物の利用に関する研究
- ・公開研究会「シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族、文化、言語」の共同開催（平成20年1月26、27日：京都大学京大会館）
- ・同公開研究会の再討議・再調整を経た報告書の共同出版（平成21年2月）
- ・古代オリエント博物館でのシリア現地調査最新成果のパネル展示公開（平成21年2月14日～3月15日）
- ・国際シンポジウム“Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria”の開催（平成21年11月21日～23日：サンシャインシティー文化会館）

計画研究「西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」

佐藤宏之

1. 研究組織（研究協力者略）

研究代表者

佐藤宏之（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

研究分担者

大沼克彦（国士舘大学イラク古代文化研究所教授）

橘 昌信（別府大学文学部教授）

安斎正人（東北芸術工科大学東北文化研究センター教授）

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、「セム系部族社会の形成」という領域全体の研究目標の一端を担うため、セム系に限らず、広く部族社会一般が人類史上に出現するプロセスとその要因およびそれらの相関的な関係を明らかにすることにある。西アジアにおける部族社会の形成プロセスの初期段階を探る試みは、少なくとも後期旧石器時代に遡及した、旧大陸各地の人類の行動進化と定住化プロセスの進行過程の中に求める必要がある。

後期旧石器時代初頭に世界規模で出現した現代人ホモ・サピエンスは、氷期の不安定な気候変動等に影響された資源構造の変化に伴い、次第に各地の動植物資源に代表される地域生態に多面的かつ効率的に適合した地域社会・文化を形成しはじめる。この時、最初の分節社会（初期的部族社会）の初源形態が誕生した可能性が高い。本研究では、上記の定説化した社会進化論に立脚するよりも、むしろ最近注目を集めつつある、威信獲得行為の発達が富者（エリート）と一般人との分節化を促進し、社会分節化のトリガーとなったと考える祭祀行為起因説を参照枠としながら、旧石器社会の中に社会分節化の兆しを探る視座を採用していきたい。

3. 主たる研究成果

出現以来人類は、何らかの集団を形成して生活を送ってきた。アフアーレンシスやアウストラロピテクス等は性差に偏りのある群れ社会を形成していた

と考えられているが、原人になると次第に家族を形成するようになったと思われる。この家族の形成以降、現生狩猟採集民に認められるようなバンド社会に類似した社会を構成するようになったと考えられるが、普通バンド社会は分節社会とは呼ぶことができないため、平等社会と見なされている。分節社会とは、氏族や部族のような何らかの地域社会が形成されるか、あるいは階層のような社会構造内の複雑化が発生した社会を指し示すことが一般的である。

今日分節社会の代表的存在とされる部族社会の特徴としてよく指摘されるのは、土地の占有（領域化）、（擬制的）血縁関係の重視、共通の言語、習慣・文化の共有、信仰・宗教の共有、自己（集団）アイデンティティーの形成と他者との競合等である。レンフルー等によって指摘されたこれらの人類学的特徴を考古学的に検討することは容易ではないが、すくなくともその一部は、分析可能と考えられるので、これらの諸特徴が旧石器社会に確認されるかどうかを検討する。

伝統的な人類学・考古学の理論研究では、人類社会の進化に関する理論を、唯物論を通奏低音とする発展段階論として理解してきた。その代表的な学説は、生産経済発展段階論とでも形容可能な学説群で、E. タイラーやH. モルガンといった人類学の創始者に始まり、H. スペンサーの社会ダーウィニズムにも通底している。モルガン学説に強く影響を受けたF. エンゲルスやK. マルクスによって一応の完成を見たこの学説では、農耕の発達による余剰生産の蓄積とその再配分をコントロールする支配者ないし支配者階級の形成という階級社会の出現に社会の分節化の始まりを見た。M. フリードやE. サーヴィス・M. サーリンズ等の新進化主義者は、農耕社会が成立する新石器時代を部族社会と定義し、旧石器社会は社会分節化が出現する以前の平等社会と見なした。

社会構造の複雑化・構造化（＝階層化）を指標とするこの新社会進化論は、今日でも非常に大きな影響力を保持しているが、定住型部族社会を前提としているため、そのままでは遊動型社会である旧石器社会の分

析・操作概念としては適当ではない。そこで近年では、社会の分節化の契機として、現生狩猟採集民社会等によく見られる威信獲得を目的とした儀礼行動に着目する研究が注目を集めている。B.ヘイデンやM.ゴドリエ等によれば、狩猟採集のような余剰を生まない低経済段階でも、エリート層やビッグマン・グレートマンと呼ばれる個人が、集団内・間の競争的な儀礼交換をコントロールすることにより威信獲得行動を活発に行い、それを契機として社会の分節化が進展すると考えた。この祭祀統合説とも仮称できる社会階層化論の立場にたつと、新石器時代の定住型部族社会に至る分節化のプロセスの検討が理論的に可能となる。いわば生業（生産）から儀礼（社会）に視点をスライドさせることにより、旧石器時代における社会分節化の可能性とその出現プロセスが具体的に分析可能となろう。

旧石器時代の人々は遊動型狩猟採集民であったが、ネアンデルタール等の先人類との比較研究が進んでいるヨーロッパでは、現生人類が出現した4～3万年前になると、それ以前の時代に比べて、空間や土地利用の階層的構造が飛躍的に輻輳化していることがわかっている。ネアンデルタールの段階では、生活上の単位集団が近接する集団と緩やかな関係性（おそらく婚姻関係を主）を有するにとどまっていたらしいが、現生人類になるととたんに複雑化した。中・大型獣狩猟を主とする広域移動型資源開発戦略を重視する寒温帯地域の現生人類の行動圏は広域化し、そのため隣接集団との同盟関係を強化することが要請された結果、生活圈・資源交換圏・通婚圏・様式圏等が重層化した空間構造を生み出していたことが、石器石材や石器型式、装飾品の材料・様式等の分析から推定されている。このような空間構造の輻輳化は、ヨーロッパに限られた現象ではなかった。例えば日本列島・朝鮮半島等では、100～200km程度を単位とする地域石器群（社会）が後期旧石器時代後半期には形成されており、後期旧石器時代末期の有舌尖頭器石器群では、北海道と本州以南のような、より広域に地域を越えた様式（社会慣習）的な差異の存在も発見されている。このような現象は、遊動型狩猟採集民による計画的行動戦略の強化に基づく階層的な社会構造出現の初期段階を示唆している可能性が高い。

一方儀礼行動の側面ではどうであろうか。東方グラ

ベット文化に属するロシア・バイカル地方のマリタ遺跡では、偶像・垂飾等の各種骨角製の副葬品を伴った複数の墓が出土しており、シベリア各地の同時期の遺跡でも同様な発見例がある。南ドイツの後期旧石器時代初頭のオーリニャック文化を始めとして、後期旧石器時代の各文化でも、数多くの骨角製装飾品や人形・動物形骨角製偶像が発見されている。現生人類がヨーロッパ等よりもはるかに古くから存在したと推定されているアフリカでは、南アフリカ・ブロンボス洞窟等のMSA期相当層から7万年前の貝製ビーズが発見されているが、最近西アジア・レヴァントのスフル洞窟からは、同様な貝製ビーズがより古い時期の文化層（10万年前以前）から発見された。またモスクワ近郊のスギール遺跡では、各種骨角製装飾品とともにマンモス牙製の槍が真っ直ぐに整えられた状態で副葬された墓が発見された。特に重要なのは、この墓から検出された2体の人骨が子供であった点にある。現生狩猟採集民の事例から、狩猟採集民においても狩猟に優れた狩人のようなエリートの存在がよく報告されているが、彼らは優れた技術の保有能力によって威信を獲得しているため、子供に権威がそのまま伝達されることはない。一方スギールの例では、子供にもかかわらず非常に手厚い埋葬が行われており、個人的な威信の世襲的扱いがすでに存在していた可能性を示唆している。断片的な事例であるが、これらの例からみると、後期旧石器時代の一部の地域では、個人の差異化や他集団と区別する自集団的アイデンティティーを示唆する象徴品・物・装置（洞窟壁画等）が発生していた可能性は高い。

後期旧石器時代には、後の新石器時代以降の部族社会を準備したようなある種の分節社会の萌芽が存在した可能性は大きいと言えよう。しかしながらその社会は、後の部族社会と比較すると、いびつで不完全な分節化にとどまっていたと考えられる。そしてその分節社会は、新石器型の定住部族社会ではなく、あくまでも遊動型の分節社会にとどまっていた。後期旧石器社会は、祭祀や威信獲得行動によってもっぱら社会の分節化と統合が図られており、これを遊動型先部族社会と呼ぶことができるとすれば、直接的な関係を想定することは難しいとしても、セム系のような遊牧型部族社会の構造を考える上で重要な仮説となろう。

計画研究「西アジア乾燥地帯への 食料生産経済波及プロセスと集団形成」

西秋良宏

1. 研究組織

研究代表者

西秋良宏（東京大学総合研究博物館教授）

2. 研究の目的

本特定領域研究が焦点をあてるビシュリ山系はシリア砂漠の北端に位置する。年間降雨量は200 mm足らずであって、天水農耕を営みうる地域にない。こうした乾燥地への食料生産民の進出プロセスを多面的に明らかにし、前3千年紀以降、当地に展開した内陸ビシュリ集団が形成された素地を探るのが本研究班の目的である。(1)食糧生産経済が開始された新石器時代、およびセム系部族社会形成期と目される青銅器時代の乾燥地進出状況を点検し、さらには(2)青銅器時代における近隣拠点村落の集団との関係、社会構造を野外調査、既存資料分析によって具体的に明らかにする。

3. 主たる成果

(1)西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセス

ユーフラテス河中流域ビシュリ山系、天水農耕限界域にあたるシリア東北部ハブール平原、イラン西部マルヴ・ダシュト平原、さらには南コーカサス地方クラ平原における状況を比較検討することによって、初期食糧生産民の乾燥地進出プロセスについて見通しを得ることができた。すなわち、いずれの地域においても牧畜経済導入期が本格的な乾燥地開発の契機となっている。ただし、時期は地域によって異なる。前10千年紀には牧畜が始まった新石器化核地域に近いビシュリ山系およびハブール平原では前9千年紀末ないし8千年紀初め、一方、核地域から1000キロほど離れるマルヴ・ダシュト平原、クラ平原では前8千年紀後半ないし末である。前者は、牧畜狩猟併存期から牧畜への移行と機を一にしている。後者については、伝統的に無関係の地域でありながら拡散が同時期であることを鑑みると、8千年紀後半の急激な気候悪化が拡散の引き金になったので

はないかと考えられた。

(2)ビシュリ山系の先史時代開発史

6シーズンにおよぶ遺跡踏査によってステップ内で総計約200の先史時代遺跡を発見した。これをもとに、従来、本格的調査がなされていなかったビシュリ地域について、下部旧石器時代（中期アシュურიアン）以降青銅器時代にいたるまでの開発史を明らかにした。ほぼ全ての時期の遺跡を同定しえたが、先土器新石器時代初めの遺跡は未発見である。その後、先土器新石器時代末から土器新石器時代初頭には遺跡が増加する。そして、銅石器時代には遺跡が減少し、前3千年紀の前期青銅器時代に遺跡が激増する。その増加ぶりは突発的にさえみえるもので、新石器時代のそれとは比較にならない。かつ石片のみが小規模に散らばる散布地が増加することから、ビシュリ山系の乾燥ステップに本格的に遊牧民が展開し始めたのと考えられた。直前にあたる銅石器時代の遺跡が少ないことから、青銅器時代遊牧民は新石器時代以来、ステップに展開していた遊牧民がそのまま居座ったものではないと推定された。

(3)青銅器時代乾燥地開発民の同定法

乾燥地に展開した青銅器時代集団を考古学的に同定できたのは、彼らが残した石片の時代鑑定が可能になったからである。従来、青銅器時代の石器研究と言えば、カナン石刃を中心とした農耕具の分析が主であった。乾燥地で農耕具は発見されない。したがって、乾燥地の石器散布地は時代が同定できなかったのが現状である。本研究では、総括班が主催したガーネム・アル＝アリ遺跡で出土した青銅器時代石片、さらには以前、代表者が調査した新石器時代～銅石器時代石器群（ドゥアラ、テル・コサク・シャマリ）の統計的分析を実施し、乾燥地に多々、分布している石片の中から青銅器時代標本を判別する方法を開発した。これにもとづき最初に同定した遺跡の名前をとって、この独特な青銅器時代石片群をシャブーティアン

(Shaboutian)と命名した。シャブーティアン石器群は、その構成からみて遊牧民の短期逗留地に残されたものとみられる。すなわち、このインダストリーの同定は、乾燥地における前期青銅器時代遺跡のさらなる発見に道を拓く。

(4)青銅器時代における集団構造

前3千年紀、前期青銅器時代におけるビシュリ山系の集団構造について踏査が示唆をもたらした。数十にのぼる該期遺跡群は拠点集落（河川低地のテル）、短期逗留地（石片散布地）、墓群、石材採取地等に分類できた。その分布を調べると、拠点集落と墓地群が明確なペアをなして河川流域に等間隔に分布していることが判明した。集落の住人がそれらの墓に埋葬されたと推察されるが、一方で、墓群は河川から数キロ内陸まで広がる広大なものであるため、被葬者には遊牧民も含まれると考えられた。実際、墓群には遊牧民の所産と信じられているケルン墓を含んでいる。集落と墓にともなう石器（シャブーティアン）が完全に同工であることも勘案すると、これらの遺跡ペアは同一集団、すなわち、半農半遊牧集団の一つの単位を表現してい

ると判断された。そのペアがほぼ等間隔に分布していることは、そうした集団単位が複数、併存しながらビシュリ山系社会を構成していたことを示唆する。

4.「セム系部族社会の形成」研究への寄与

部族社会は遊牧民社会にルーツをもつとされるから、その形成研究は遊牧民出現過程の研究と密接不離である。一方、セム系集団形成のカギを握ると目されるのは前3千年紀、前期青銅器時代における内陸集団の動向である。本計画研究の成果は、その両面において直接的な知見を提供している。

牧畜技術を備えた集団の乾燥地展開は新石器時代に起源するが、前3千年紀のビシュリ山系青銅器時代民は直接的後裔ではなく再展開した集団であると推察された。遺跡踏査の結果は、彼らが遊牧と農耕の双方をおこなっていたこと、社会はいくつかのレベルに分節化され、かつ領域をもっていたことを示唆する。前3千年紀の粘土板文書が言うマルトゥの部族社会が考古学的に見えてきた。本研究の成果を前2千年紀の状況と比較することで以後の社会変化過程の考察も可能となった。

計画研究「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」

藤井純夫

1. 研究組織

研究代表者

藤井純夫（金沢大学歴史言語文化学系教授）

連携研究者

足立拓朗（中近東文化センター附属博物館研究員）

2. 研究の目的

セム系遊牧部族の形成過程を、墓制面から追跡すること。それが、本計画研究班の研究目的である。遊牧部族（より具体的には青銅器時代の遊牧部族）を選択したのは、彼らこそがセム系部族社会の歴史的・構造的源泉であったと考えられるからである。墓制に着目したのは、それが先史遊牧民の実像に迫るほぼ唯一の考古学的アプローチだからである。青銅器時代遊牧部族の墓域組成を通して、「セム系部族社会の形成」過程を透視・追跡すること。本計画研究班は、この点を探求した。

3. 研究の方法

セム系部族社会の形成過程を解く鍵は、新石器時代の後半から青銅器時代にかけて成立した初期遊牧文化にあると考えられる。しかし、西アジアの考古学的調査は都市・農村遺跡の側に大きく偏っており、初期遊牧民遺跡の調査はまことに低調である。なぜなら、集落を形成せず、遊動生活を送る初期遊牧民の遺跡は、容易に捕捉できないからである。仮に捕捉できたとしても、出土遺物が少ないので年代推定が難しいという事情もある。そのため、セム系部族社会の原点とも言うべき先史遊牧文化の研究は、未だに暗中模索の状態にある。唯一の手がかりは定住民側の文字記録であるが、それには自ずから限界がある。こうした資料的・方法論的制約を克服しない限り、セム系部族社会研究の進展は望めない。

そこで本研究班が着目したのが、彼らの墓制である。集落を形成しない遊牧民も、墓だけは造る。しかも、視認性の高い石積み墓（ケルン墓）を造る。従って、墓制面から彼らの実像に迫ることは十分可能であろう。遊牧民の墓域の多くは、部族・氏族単位で造営されている。その意味で、墓制は、遊牧部族社

会の形成過程を追跡する有望な視点となり得る。

そうした方法論的展望の下、三つの調査フィールドを設定した。第一は、シリア中部のビシュリ山系である。ビシュリ山系は、西アジア・セム化の第一波となったマルトゥ・アムッルの根拠地と言われてきた。ただし、それは粘土板文書中の間接的示唆であり、考古学的な証拠は伴っていなかった。我々の調査では彼らの具体的足跡、すなわち青銅器時代遊牧民の墓域を探索した。本計画研究班が主力を注いだのが、このビシュリ山系の調査である。

他の二つのフィールドは、ビシュリ山系青銅器時代ケルン墓群の相対的位置づけを検討するために予備的に設けたものである。そのうちの一つ、ヨルダン南部のジャフル盆地では、特定領域研究の開始以前から青銅器時代ケルン墓の調査を重ねてきた。特定領域研究ではその一部を継続実施すると共に、これまでに蓄積されたデータを総括して、先史遊牧民のケルン墓編年を構築した。もう一つのフィールド、アラビア半島では広域踏査を実施し、比較資料の収集に努めた。

一連の調査では、1) 中東セム化の第一波となったマルトゥ・アムッルの考古学的足跡を確認し、その社会組織について検討すること、2) これを基にマルトゥ・アムッル問題に新しい展望を拓くこと、を当面の目標とした。そのため、ビシュリ山系の調査を最優先し、ジャフル盆地やアラビア半島の調査は補足的に実施した。

4. 主たる研究成果

本計画研究班の主な研究成果は、以下の4点である。

- 1) ビシュリ山系における青銅器時代ケルン墓群の存在を明らかにしたこと。これによって、粘土板文書中の間接的示唆に過ぎなかったマルトゥ・アムッル問題を考古学的研究の俎上に載せることが可能となった。（ただしそれは、前3千年紀のマルトゥ、すなわちシュメールのマルトゥではなく、2千年紀前半のマルトゥ、すなわちマリ王国周辺のマルトゥであったが）
- 2) 上記ケルン墓群の造営集団を重層的に単位分解できる可能性を示したこと。すなわち、上はビシュ

リ山系北麓ケルン墓群という大きなまとまりから、下は10数基のケルン墓から成る基本ケルン列まで、数段階に組成分解できる可能性を示した。これによって、ビシュリ山系北麓のケルン墓群造営集団（すなわち、マルトゥ・アムッル）の社会構造を復元する手がかりが得られた。

- 3) ジャフル盆地の先史遊牧民ケルン墓編年という時間的な大枠の中で、ビシュリ山系北麓ケルン墓群を相対的に位置づけたこと。これによって、遊牧部族社会の形成問題を、遊牧化過程全体の中で時系列的に追尾することが可能になった。
- 4) アラビア半島各地における一連の踏査によって、ビシュリ山系北麓の中期青銅器時代ケルン墓群がケルン墓分布の北限に位置する、時代的にも最も新しい事例であるとの展望を得たこと。

5. 「セム系部族社会の形成」研究への具体的寄与

本計画研究班の調査・研究は、以下の4点において、特定領域研究「セム系部族社会の形成」に寄与した。

- 1) これまで不明であったマルトゥ・アムッルの具体的足跡を特定したことによって、「セム系部族社会の形成」という困難な課題に対する考古学的アプローチを実現したこと。また、その資料を提供したこと。
- 2) ケルン墓造営集団の単位分解を通して、系族・氏族・部族・部族連合の各階層に応じた墓域組成の存在

を示唆したこと。また、これによって、セム系部族社会の典型であるマルトゥ・アムッルの社会組成を復元する手がかりを得たこと。

- 3) ジャフル盆地の先史遊牧民ケルン墓編年、アラビア半島ケルン墓群の踏査成果、および定住域編年との照合を通して、青銅器時代の遊牧部族社会が「沙漠の首長制 desert chiefdom」または「沙漠の王制 desert kingdom」、ただし「社会的等質性を保持した擬似的な首長制・王制」と定義し得ることを示したこと。なお、ビシュリ山系北麓の中期青銅器時代ケルン墓群、すなわち前2千年紀前半のセム系部族社会は、「沙漠の王制（ただし社会的階層化の未発達な擬似的王制）」に相当するものと思われる。その背後には、マリ王国との接触および人的還流が想定される。こうした仮説的展望を提示したことも、寄与の一つである。
- 4) 一連の調査・研究を通して、他の考古学研究班には比較資料としてのビシュリ山系ケルン墓群の存在を、粘土板文書研究班には墓制面でのマルトゥの実像を、それぞれ提示した。また、形質人類学研究班には出土人骨標本を、動植物研究班には遺跡周辺植生資料を、地質研究班には年代測定資料を、民族学研究班にはフィールドとしてのビシュリを、それぞれ提供した。これら一連の資料提示は、各研究班間の協力関係の樹立、およびその活性化に寄与した。

計画研究「西アジアにおける都市化過程の研究」

常木 晃

1. 研究組織

研究代表者

常木 晃 (筑波大学大学院人文社会科学研究所教授)

2. 研究の目的

現在、都市の起源として欧米の学界で広く認められているのは、紀元前 3500 年ごろのメソポタミア・ウルク期の都市遺跡群である。都市の出現は人間社会のあり方を根本的に変え、これ以降人類の歴史は都市を中心に回っていくことになるが、なぜ、どのように都市が歴史上に登場してきたのか、この人類史の一大画期をめぐって、これまでも様々な仮説が提示され議論されてきた。環境変化や資源の偏在、戦争、交易など様々な要因が取り上げられてきたが、いまだ十分な回答が得られていない。私たちは、その大きな原因は、メソポタミアにおける都市の発生を農耕社会の発展という視点からしか捉えてこなかったことにあるのではないかと考えた。現代のアラブ社会を見ても、都市と砂漠という、全く異なる環境に生きる都市民と遊牧民が、様々な部族社会的ネットワークで結節され、互いに離反集合を繰り返しながら統合的な社会を形成している。本計画研究では従来の視点から離れて、都市形成に当たって遊牧社会に代表される部族的社会が果たした役割を、考古学的、文献学的、言語学的資料を抽出しながら明らかにしていくことをめざした。

3. 研究の方法

本特定領域全体の調査地でもあるビシュリ地域およびそれと対照的な北西シリアのイドリブ地域において、考古学的調査を実施した。ビシュリ地域では、ユーフラテス河流域の前期青銅器時代のテル・ガーネム・アル・アリの発掘調査とその周辺での民族考古学的調査を通じて、乾燥した平地地帯での遊牧社会の起源と部族社会の形成の解明を目指した。イドリブ地域では、水が豊富で豊かな植生環境に恵まれたエル・ルージュ盆地において、主に新石器時代のテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査を行い、都市的集落の起源とその発展、部族社会の発達、そして

そこに展開した交易ネットワークの解明を目指した。そして都市の発達を時間軸でも捉えることを念頭に、両地域を比較検討した。

また、文献学的言語学的研究を担当した研究分担者は、他の計画研究班とも協力しながら、楔形粘土板文書に現れる紀元前 3～2 千年紀のアムル人、アラム人などに関する情報の追跡、言語学的に見たセム語の起源と比較研究などについて研究を進めた。

4. 主たる研究成果

本計画研究の主な研究成果として、以下の 4 点を挙げる。

1) ビシュリ地域の紀元前 3 千年紀の農耕村落の解明

ビシュリ地域に所在する前期青銅器時代の農耕村落の一つであるテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査に参加し、ビシュリ地域において遊牧社会が登場した紀元前 3 千年紀ごろのユーフラテス河中流域の農耕村落がどのような規模でどのような集落形態であったかなどについて、その実態解明の一端を担った。本計画研究班のメンバーは、主として、ガーネム・アル・アリの居住の層位的な探究、および表面調査からみた集落プランの記録を担当した。その結果、ガーネム・アル・アリ遺跡は主として前期青銅器時代の開始前後から前期青銅器時代 VI A 期までの間断続的に居住されたこと、前期青銅器時代 III 期～VI A 期の住居配置は拡散的で、集約的な集落構造をとっていなかったことなどが判明した。

2) 墓地の形成過程について民族考古学的手法からの提言

ガーネム・アル・アリ村において特に墓地に関する民族考古学的調査を実施し、墓地という物質文化と人間集団がどのようにかかわって墓地が形成されていくのかについて予察を得た。一般的に、墓地の空間配置と人間集団の間には強い相関が認められた。ガーネム・アル・アリ村の例では、墓地内のアイーラ集団ごとの空間配置は、同集団間の居住配置とよく相関していた。人間集団規模は、同一墓地内のアイーラ集団間の混合度合いに影響を与えていた。また、墓地内の墓の形式および墓石の型式は、

一般に人間集団の違いを反映していなかった。墓の形式の違いは主に個人の社会経済的地位や政治的地位の差を反映し、墓石の違いは年代や経済的地位、単なる好みによる。墓分布の展開は、立地により異なっていた。これらの予察は、先史時代の墓地を考察する際の類推の基盤を提供する。

3) 西アジア先史時代社会の複雑化と、血縁的な人間集団の存在の可能性を提示

シリア北西部イドリブ県のエル・ルージュ盆地に所在する巨大な新石器時代集落であるテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査を実施し、その研究成果から、紀元前 8600 年～5800 年にかけての集落の形成、変遷、衰退過程を明らかにした。当地での集落の発生から都市的な巨大集落形成まで、どのように社会が複雑化していったのかについて、多くの考古学的資料を得て考察を加えた。特に紀元前 6500 年ごろの集落の様相の解明に力を注ぎ、社会の複雑化が相当進行していたことや、社会の運営に儀礼活動が重要な役割を果たしていたことなどが判明した。封泥シ

ステムからみるとケルクの社会には少なくとも 5 つ以上の物資管理グループが存在したと推定され、それらは、新石器時代の個別の血縁集団であった可能性を示唆した。

4) セム語の起源、セム語族の原郷問題と、セム系部族社会の形成について提言

主に楔形粘土板文書史料に基づいて、都市社会の形成過程にセム系部族社会がどう関わってきたのかについて、文献学と言語学の研究分担者が考察を進めた。文献に現れるセム系言語集団の系譜とビシュリ山系との関わりについての基本的事項を網羅的に整理し、セム諸語、セムに関わる古代文献の一覧を作成した。また、セム祖語として再建される語彙を抽出、検討した結果、セム語の原郷は農耕牧畜が行われていた地域内にあることを明らかにした。さらに楔形文書の中にみられるアムル系、アラム系の名前を抽出することで、紀元前 3 千年紀から 2 千年紀にかけて遊牧系の出自を持つアムル人、アラム人が歴史に登場してくる状況を明らかにした。

計画研究「北メソポタミアにおける アッシリア文明の総合的研究」

沼本宏俊

1. 研究組織

研究代表者

沼本宏俊（国士舘大学体育学部教授）

連携研究者

・文献

山田重郎（筑波大学大学院人文社会科学研究所研究科教授）

柴田大輔（筑波大学大学院人文社会科学研究所研究科助教）

・考古学

久米正吾（国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員）

真保昌弘（国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員）

・建築・測量

柴田英明（国士舘大学理工学部教授）

・保存科学

北野信彦（東京文化財研究所伝統技術保存修復室室長）

研究協力者

・建築・測量

小野勇（国士舘大学理工学部技術職員）

2. 研究の目的

本研究は、アッシリア時代の遺跡の発掘調査や既存の考古・文献資料の多角的な分析を行い、新たな知見を提供し、未だ不明瞭なアッシリアの勢力範囲、支配体制、社会構造の全容解明への貢献を主眼とする。特に、帝国化の黎明期に相当する前2千年紀のアッシリアと近隣諸国との従属関係や帝国化の発展過程を探り、アッシリア帝国の興亡と帝国主義の実体の究明に焦点を置いている。

3. 研究の方法

- ①本計画研究では、研究遂行の一環としてテル・タバンの発掘調査を実施する。テル・タバン（約300×350m、高さ約25m）は、シリア北東部のハッ

サケ市の南約30km、ユーフラテス川の支流、ハブール川の中流域にある。タバンでは古バビロニア時代から新アッシリア時代（前2～1千年紀）にかけての連続した層序が確認されており、本研究を遂行するうえで最適の遺跡である。本研究期間内には出土文字資料・遺構・遺物を分析し、暗黒時代とされている古～新アッシリア時代の編年の構築を目指す。

- ②テル・タバンの1997－99、2005年冬季調査で出土した中期アッシリア時代の楔形文字史料と本研究期間内の調査で出土する文字史料の解読。
- ③タバンの調査と並行し、領域研究の拠点遺跡シリア、ラッカのガーネム・アリの直近の墳墓群発掘調査を行う。

4. 2005－2009年度の研究概要と成果

2005年度

- 1.テル・タバンの発掘調査（8月末から9月末）
中期アッシリア時代の粘土板文書31点の粘土板文書を発見。最大の成果は土器焼き窯の内部から古バビロニア時代（前18世紀後半）の焼成粘土板文書が10点出土。ダマスカス博物館で前年度の調査で出土した約200点の中期アッシリア時代の粘土板文書の整理・解読作業を実施。

2006年度

- 1.テル・タバンの発掘調査（8月中旬～9月末）
古バビロニア時代の粘土板文書が14点出土した。中期アッシリア時代の巨大な地下式焼成煉瓦造墓を発掘した。計44点の楔形文字資料を発見した。ダマスカス博物館で中期アッシリア時代の粘土板文書の整理・解読作業を継続。

2.ビシュリ調査

シリア、ラッカのビシュリ山系の遺跡の踏査（第1次現地調査：19年2月）に研究代表者が参加した。

2007年度

- 1.テル・タバン調査（8月初旬～9月末）

新アッシリア時代の公共的大日乾煉瓦造建物跡、定礎ブロンズ像を発見。計 52 点の楔形文字資料を発見した。

2. ビシュリ調査

テル・ガーネム・アリの 2 次、3 次、5 次調査に、研究代表者が参加した。5 次調査では、同遺跡の近郊にある前期青銅器時代の墳墓群の踏査を行い、多数の墓を確認した。

2008 年度

1. タバン調査 (8 月初旬～9 月末)

最大の発見は、中期アッシリア時代の医術・呪術粘土板文書が出土したことである。計 46 点の中期アッシリア時代の楔形文字資料を採集した。

2. ビシュリ調査

テル・ガーネム・アリ・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墓群の調査を 5 月と 10 月の 2 次にわたって実施。

2009 年度

1. タバン調査 (8 月初旬～9 月末)

計 49 点の楔形文字資料を採集した。最大の成果は、中期アッシリア時代の粘土板文書群の発見で、少なくとも 100 点以上の文書片が詰まっていると思われる。

2. ビシュリ調査

2009 年春の第 3 次調査ではテル・シャップート墳丘墓群の試掘調査を、同年秋の第 4 次調査ではガーネム・アル・アリ村のワディ・ダバ墓地の試掘調査を行った。

5. 主たる研究成果

文書発見と解読成果：本計画研究期間中の計 5 回の調査では古バビロニア時代 (前 18 世紀)、中期・新アッ

シリア時代 (前 13～12, 9～7 世紀) の計 253 点の楔形文字史料 (粘土板文書、煉瓦碑文、円筒形碑文、土製鋌、土器片) を採集。

1. 2005 年 2 月発見の中期アッシリア時代の粘土板文書群の解読成果：

- ・前 13 世紀から前 12 世紀にかけてのマリ国“タベトゥ” (テル・タバンの) の王宮行政の記録であったことが判明。
- ・マリ国“タベトゥ”の王統を確立。

2. 古バビロニア時代の粘土板文書の解読成果：

- ・ハブール川中・下流域の発掘調査では初の発見。
- ・テル・タバンは古バビロニア時代のハブール川中流域の統轄拠点“タバトゥム”であったことを実証。
- ・前 18 後半～17 世紀のハブール川中流域の支配変遷を解明。

3. 古バビロニア時代～中期・新アッシリア時代のハブール流域の標準遺跡になる。

4. 邦人初のメソポタミア地方における楔形文字使用期の歴史時代の考古学的調査。

- ・考古学と文献学の共同した調査研究が定着。

6. 「セム系部族社会の形成」研究への具体的寄与

1. テル・タバン出土文字資料の部族社会に関連するデータ。

- ・古バビロニアの不動産下賜文書に記述されたタバンの領主 (スゲーガム制)。
- ・古バビロニア文書に認められるアムル語の人名、地名。

2. テル・ガーネム・アリ遺跡直近の墓群の発掘成果との関連。

計画研究「〈シュメール文字文明〉の成立と展開」

前川和也

1. 研究組織

研究代表者

前川和也 (国土館大学 21 世紀アジア学部教授)

連携研究者

前田 徹 (早稲田大学文学研究院教授)

松島英子 (法政大学キャリアデザイン学部教授：平成 20 年度より)

森 若葉 (総合地球環境学研究所上級研究員)

依田 泉 (常磐大学国際学部教授)

研究協力者

有賀望 (筑波大学)、大西康之 (中央大学)、川崎康司 (早稲田大学)、川本正知 (奈良産業大学)、木内智康 (東京大学)、田中祐介 (京都大学)、辻田明子 (京都大学)、中田一郎 (中央大学)、長谷川敦章 (筑波大学)、堀岡晴美 (国土館大学)

2. 研究の目的と方法：研究の目的、対象

本研究の目標は、第 1 に、主として前 3 千年紀において「シュメール文字文明」がメソポタミア北部、シリア・ユーフラテス流域およびイラン・スサ地域にどのように拡大・普及していったか、第 2 に、そのさいどのような文化接触がおこったか、第 3 に、当該時期において都市社会と周辺の農村あるいは牧畜世界とがどのように相互に交渉をもったかを、主として文献資料 (楔形文字粘土板テキスト) から考察することにある。「シュメール文字文明」とは、〈漢字文化〉、〈漢字文明圏〉の概念に触発されてわれわれが考案した概念である。前 3 千年紀にはいって北メソポタミア、シリア各地に都市国家あるいは領域国家が成立するとともに、すでに前 4 千年紀末南部メソポタミアにおいてシュメール人によって生みだされていた文字記録システムがいちはやく導入される。楔形文字記録システムがシリア・メソポタミア各地の国家行政機構の確立・運営に決定的な役割をはたしたのである。セム系諸語 (たとえばアッカド語) を話す人々にとっても、シュメール記録システムは重要であった。シュメール語彙を多用して行政記録を作成することが可能であったからである (わが国の木簡と比較せよ)。要するに、シュメール文字によ

る記録システムの普及によって、いわばメソポタミア・シリア世界が一体化したのである。

これらの課題を考究するために、我々が当初計画したのは、以下のような研究分担であった。前川：前 3 千年紀シュメール語行政記録の解析。前田：前 3 千年紀から 2 千年紀にかけての宗教と王権イデオロギーの研究。森：シュメール語文法構造の研究と、シュメール語・アッカド語の相互交渉。依田：前 3 千年紀から 2 千年紀にかけての法制度。なお松島は平成 20 年度より連携研究者として、イランにおける粘土板記録システムの展開およびメソポタミア文学テキストにおけるシュメール語彙の考究を担当した。

3. 研究の成果

「シュメール文字文明」の拡大と展開過程という課題にかんしては、1. シュメール語彙リスト研究 (前川)、アッカド語文学テキストにおけるシュメール語 (松島)、アッカド語によるシュメール語文法構造への影響 (森)、シリア・メソポタミアにおけるウマ科動物の利用と語彙 (前川)、メソポタミア・インダス交渉 (前川・森)、イラン国立博物館 (テヘラン) 蔵粘土板文書調査 (松島) といった成果をあげることができる。いずれも満足すべき、あるいは将来のさらなる研究が期待できる大成果であったと自負している。たとえばシリア各地ではシュメール語彙リストがはやくから受容され、異様な熱心さでテキストが学ばれた。そしてそれは、じつに前 1 千年紀までつづく。そのことは松島によって鮮やかに例示されている。前 3 千年紀では、文字記録システムを受容するにあたって、語彙リスト学習による書記養成が必須であったことが、とりわけエブラ文書研究によってあきらかとなった (わが国における木簡と『文選』)。世界ではじめて、前 3 千年紀シリア・メソポタミア粘土板で「イエロバ」がどのように表記されていたかが前川によってあきらかにされ、また北メソポタミアからエブラや南部メソポタミアに「ペルシアノロバ」 (欧米の研究者はイエロバとノロバの交雑種だという) が高値で輸出されていたことが確認された。前 3 千年紀のシリア・メソポタミアは、「ペルシアノロバ」の利用においても共通していた。

メソポタミアとインダス間の大規模な交流が可能になったのはアッカドによるイラン地方征服によるところがおおきいことが前川と森によってあきらかにされるとともに、イラン研究者との交流が生まれ、松島によるイラン国立博物館粘土板調査が可能となったのである。

前田徹は「〈シュメール文字文明〉世界」のなかでの宗教と王権イデオロギーを考究し、大きな成果をあげた。ひとつには、シュメール語王碑文と王讃歌の注意深い解析であり、前田によってあらたな読み、解釈がもたらされた箇所はおおい。また前田は南部メソポタミアの都市的世界が、東方あるいは西方の人々の流入をどのように受け入れたか、前田のいう「蛮族侵入史観」イデオロギーは、いつ頃どのようにして生まれたのかを克明にあきらかにすることができた。たとえばウル第3王朝2代王のときに書かれた王名表¹では、東方から流入し、1シュメール都市を占領したグティウムにたいする差別意識はまだみられない。また前田は前2千年紀はじめに西方から流入したアムル人がいかに自己を認識し、文字テキストにそのことを記録するようになったかを「マルトゥ：族長制度の確立」として表現した。ここにわれわれは、本特定領域研究の研究対象である「セム系部族」にかんする、本格的な論考を得ることができた。前3千年紀のマルトゥと南部メソポタミアの交流にかんしては、堀岡晴美による詳細な研究が行われた。

前3千年紀から2千年紀の王権イデオロギーにかんしては、前川が前田とはことなつた方法論で、いわゆる「棒と輪」Rod and Ringがなにを意味しているかを、はじめて統合的に論じることができた。前川によれば、「棒と輪」はふつう説明されるように測量道具などではなく、主として異民族支配の道具として神から委譲(?)されるのだということになる。楔形文字研究者や図像学者がながく論じて、結論を得ることに失敗してきた問題に、決定的な意義をもつ論議が生まれたと自負している。

前3千年紀の「シュメール文字文明世界」の考究は、必然的に前2千年紀研究者たちとの交流を要請する。

げんに前田徹は、前2千年紀前半のアムル（マルトゥ）系支配者たちの自己認識を問題としていた。では前田の問題意識に、前2千年紀のマリ文書研究者はどのように応答するのか。そのために本特定研究の他計画研究班に属する楔形文字研究者、さらに本特定研究に加わっていない研究者たちと共同研究集会を持つことが決定された。研究会は平成20年1月京都大学において、「シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族・文化・言語」の主題のもとに開催され、大きな成果を生むことができた。集会での発表は、1報告をのぞき、報告集に加筆のうえ掲載されている。

4. 特定領域研究「セム系部族社会の研究」のなかでの「〈シュメール文字文明〉の成立と展開」

前3千年紀シリア・メソポタミア世界が「シュメール文字記録システム」の受容によって、いわば一体化したことはうたがいない。シュメール・セム（アッカド）の文化接触、たとえばセム語世界のなかでもシュメール語（語彙）がはたす役割がいかに決定的であるか、また逆にセム語が書き言葉としてのシュメール語文法さえもいかにふかく変容させていくかといった点について、本計画研究は重要な寄与をなすことができた。ただ「シュメール文字記録システム」は、いうまでもなく各地のセム系都市社会において受容されたのである。われわれは、「部族」組織をあつかうばあいでも、都市世界がみた部族を議論せざるをえない。だからこそ前田は、アムル（マルトゥ）支配者の自己意識の確立過程を王碑文からさぐり、成功をおさめたのである（「族長制度の確立」）。またシュメール語王碑文や讃歌にみえる他者認識の分析、都市民の牧民あるいは他世界にたいする差別意識の分析（前田、森、前川）は、本特定研究の主テーマにたいする大きな貢献である。ただ、前2千年紀冒頭、南部メソポタミアで書かれた行政文書からアムル（マルトゥ）が大量に都市社会に流入してくる過程を抽出できるかどうかについては、わが国の研究者のなかで人を得ることができず、研究が不十分におわつたことは、やむをえないとはいえ、反省点である。

計画研究「環境地質学、環境化学、¹⁴C年代測定にもとづく ユーフラテス河中流域の環境変遷史」

星野光雄

1. 研究組織

研究代表者

星野光雄 (名古屋大学大学院環境学研究科名誉教授)

研究分担者

田中 剛 (名古屋大学大学院環境学研究科教授)

中村俊夫 (名古屋大学年代測定総合研究センター教授)

吉田英一 (名古屋大学博物館准教授)

東田和弘 (名古屋大学博物館助教)

連携研究者

齊藤 毅 (名城大学理工学部准教授)

桂田祐介 (名古屋大学学生相談総合センター研究員)

研究協力者

青木義幸 (名古屋大学大学院環境学研究科研究員)

於保 俊 (名古屋大学大学院環境学研究科博士課程、現(株)パスコ)

2. 研究の目的

ユーフラテス河中流域ビシュリ山系における自然環境の変遷を、地質学的・地形学的・環境科学的現地調査と室内実験にもとづいて解明し、地質時代から先史時代、部族社会の形成を経て現在に至るビシュリ山系の自然環境変遷史を構築する。さらに、自然と人間との関わりを通時的に明らかにすることにより、領域テーマ「セム系部族社会の形成」研究への寄与を果たす。

3. 主たる研究成果

(1) 地質学的・地形学的研究：

①発掘遺跡テル・ガーネム・アルーアリとその周辺地域の地質精査により、第三系基盤岩とそれを覆う第四系堆積層の正確な地質柱状図を作成し、層序を確立した。これは、考古学発掘調査にとっても重要な基礎データとなった。

②調査地域に発達する河成（河岸）段丘の調査を

精力的に行い、各数メートルの比高差からなる5段の段丘面を識別した。段丘成因論の観点から考察すると、最低位段丘が堆積段丘である以外、残りの段丘は浸食段丘である可能性が示唆された。テル・ガーネム・アルーアリとテル・ハマディーは最低位段丘上に立地している。¹⁴C年代測定によれば、最低位段丘の堆積の始まりは3300～3100 cal BCと推定され、テルの始まり（後出）もおおよそこの頃と考えられる。

③調査地域には、基盤を貫いて噴火した4つの第四紀火山が存在する。これらの噴火活動の時代をK-Ar法により推定した結果、最も新しいもので約138万年前であることが判った。もし誰かが噴火を目撃したとすれば、それは前期旧石器時代人のホモ・エレクトゥスであったのかもしれない。

④テル・ガーネム・アルーアリ第2発掘区の堆積物について花粉化石の抽出を試みたが、表層部を除いて花粉化石は得られなかった。これは、過乾燥により花粉化石が分解するためである。そこで、最終年度ではあったが、今度はテル・ハマディーの北に位置する、もと三日月湖の水分を含んだ堆積物から花粉化石を抽出すべく、ボーリング調査を行った。分析は現在進行中であるが、途中経過からみて何らかの植生変遷がつかみとれるものと思われる。

⑤これも最終年度の現地調査で採集した試料を使った研究であるため、現在進行中であるが、考古学班によってテルから回収された石器の原料、とくにフリントはどこから調達したのか。ビール・スバイのような立派なフリント露頭ではなく、もっと手近な河成層の礫を多用しているのではないだろうか。まだ仮説の段階である。

(2) ¹⁴C年代測定による編年：

考古学班により掘り進められたテル・ガーネム・アルーアリの第1・第2発掘区の各層準から炭質物を採集し、¹⁴C年代測定を行った。とくに第2発掘区においては8層の建築層が掘り出され、年代は下位ほど古

い傾向がある。第2発掘区全体としては、3100 cal BCから2050 cal BC、すなわちEB I期からEB IV期の全期間に居住の形跡が認められる。今後進展するであろう考古学班による土器編年の結果と突き合わせて検討することが重要である。

(3) 環境科学的分析研究：

- ① アスファルトの化学分析：テルで出土したアスファルト製品（充填剤）と天然アスファルトを化学分析して、各成分含量が互いに酷似しているかどうかを調べた。結果は、テル出土のアスファルト製品は、熱を加えられていることが原因でいくつかの揮発性成分が失われているため、天然アスファルトとの対比は難しいとの結論が得られた。
- ② 天然放射線量の測定：初年度に購入したサーベイメーターを使って、さまざまな堆積物の天然放射線量を測定した。その結果、テルを構成する堆積物、段丘堆積物、耕作地の堆積物それぞれ特徴的な値を示すことが分かり、大変興味深い。
- ③ 物質循環：河成段丘の崖面によく観察される棒状の石膏コンクリーションの非破壊化学分析を行

い、段丘堆積物内を循環する水溶液が周囲から供給される石膏成分を多く溶け込ませていることを指摘した。

4. 「セム系部族社会の形成」研究への具体的寄与

主たる研究成果で列挙したように、「自然と人間とのかかわり」との観点からいくつかのテーマを設定し、一定の成果を得た。とりわけ、 ^{14}C 年代測定は当班の研究全体の基軸であり、テル・ガーネム・アルーアリの ^{14}C 編年、最低位段丘形成の時代論は、領域研究全体としても重要な貢献であると考えられる。第四紀の地質現象と人間とのかかわり、具体的には河成段丘の発達過程とテル形成との時間的・空間的關係、さらには新期火山活動と人間とのかかわりなどについても議論を深めた。アスファルトなどの天然資源の利用面についても自然科学的に検討した。フリントの入手場所・経路については、今後さらに詳しく議論されるであろう。唯一残された当班からの重要な寄与は、花粉分析を通じた植生変遷、環境変遷の情報提供である。近々にデータをまとめて公表する予定である。

計画研究「西アジア先史時代から都市文明社会への生業基盤の変化に関する動物・植物考古学的研究」

本郷一美

1. 研究組織

研究代表者

本郷一美（総合研究大学院大学准教授）

研究分担者

丹野研一（山口大学助教）

那須浩郎（総合研究大学院大学上級研究員）

連携研究者

茂原信生（奈良文化財研究所・国立科学博物館
非常勤研究員）

姉崎智子（群馬県立自然史博物館学芸員）

研究協力者

赤司千恵（早稲田大学大学院博士課程）

Lubna Omar（京都大学大学院博士課程）

2. 目的

本研究班は、西アジアにおける家畜化・栽培化過程に伴う生業基盤の変化を明らかにし、先史社会が定住社会を経て古代都市文明社会へと変化する中で、牧畜・農耕が生業基盤となっていく経緯を探ることを目的とした。まず、ビシュリ山系地域に「セム系部族社会」が形成された過程において、その前提として、どのような動物性資源と植物性資源が利用可能であったかを把握することが必要である。都市の出現の前提としては、特に食料生産技術の発達、集約化と分業化の進行が重要であったと考えられ、この点を明らかにすることをめざした。

3. 方法

食料生産技術の発達、集約化と分業化の進行について明らかにするため、以下にあげる点に関する通時的な研究を進めた。

- 1) 偶蹄類の家畜化と植物の栽培化
- 2) 牧畜技術の発達、特に乳製品利用技術の発達と遊牧の開始
- 3) 生産性の高い作物品種の成立
- 4) 穀物と乳製品・毛織物など動物生産品の交易
- 5) 古代都市国家の経済的成立基盤

トルコ南東部からヨルダン南部にかけての広範囲にわたる地域でナトゥーフ期から青銅器時代に至る異なる時代の遺跡から出土した動物・植物遺存体資料を収集し分析した。

動物遺存体に関しては、種同定、サイズの計測、死亡年齢の推定を行った。植物遺存体に関しては、遺跡からサンプリングした土からフローテーション法を用いて炭化種子を選別、種同定を行うとともに、一部の遺跡では花粉分析を併用した。同時に、現在のビシュリ地域の植生の調査も行った。

4. 年度ごとの研究概要

2005～2006年度

周辺地域の遺跡資料の収集と分析を行った。動物遺存体分析は、トルコ南東部のユーフラテスおよびチグリス上流域の新石器時代遺跡出土の動物骨を対象とした。また、日本国内のシリア出土の動物骨資料の情報収集を行った。植物遺存体の分析はシリア北部の新石器時代の遺跡出土資料を対象とした。牧畜と農耕の開始過程に関わる時代の以下の遺跡の資料が研究の対象となった。

(シリア)

デデリエ遺跡（ナトゥーフ期）、セクル・アル・アヘイマル（PPNB および土器新石器時代）、テル・エル・ケルク（PPNB および土器新石器時代）

(トルコ)

サラット・ジャーミ・ヤヌ（土器新石器時代）、チャヨヌ（PPNA, PPNB, 土器新石器時代）

(ヨルダン)

ワディ・アブ・トレイハ（PPNB）

(イラン)

タンギ・ボラギ（終末期旧石器時代、前新石器時代）

2007～2008年度

シリア、トルコ、ヨルダン、イランの遺跡出土の動

植物遺存体の分析を継続するとともに、ビシュリ山系のテル・ガーネム・アル・アリ遺跡から採取した青銅器時代初期の動植物遺存体の分析に重点をおいた。また、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡との比較研究のため、同時期のテル・ブデリ遺跡出土の動物遺存体（ドイツ・チュービンゲン大学所蔵）の同定分析を行い、テル・モザン遺跡の出土動物骨との比較検討もおこなった。この他、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡周辺で植生調査をした。

2009年度

最終年度は、遊牧を生業とする集団との関わりと、都市文明社会の成立を背景とする経済的な変化の中で、前期青銅器時代の動物・植物利用にもたらされた変化や技術的革新について、さらに研究を進め、周辺の青銅器時代遺跡に関する既存の報告と比較検討した。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡から出土した動植物遺存体の同定・分析が完了し、動植物利用と環境に関する考察ができるようになった。農耕の開始以前から都市成立の時代にいたる西アジア広域における調査により、利用された動物・植物と環境変遷の証拠が数多く得られた

5. 主たる研究成果

新石器時代の初期農耕集落の生業基盤に関し、利用された資源の多様性、量、等について動物質食料、植物質食料の両面から明らかにした。また、ビシュリ山系のテル・ガーネム・アル・アリ遺跡における動植物

利用の詳細がわかった。この地域の前期青銅器時代遺跡の生業は、基本的には新石器時代末までに成立した定住農耕村落の資源利用の伝統を継承するものであったと考えられる。この遺跡ではオオムギが多く出土し、コムギは少ない。さらに、ブドウ、ツルナ科、アカザ科、マメ科の種子も検出された。出土した植物の種類から、遺跡周辺では灌漑農耕による塩害が進行していた可能性があること、この遺跡で家畜の糞を主な燃料としていたことなどがわかった。動物利用に関しては、ヒツジが非常に重要で、家畜は遺跡内か周辺で飼育されていたと考えられる。

6. 「セム系部族社会の形成」研究への具体的寄与

ビシュリ山系地域の前期青銅器時代遺跡では、新石器時代末までに成立した定住農耕村落の資源利用の伝統が継承されていた。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、ユーフラテス中流域の重要な場所に立地しているが、生業基盤の側面から見ると自給自足的な集落であることが推定された。また、遺跡周辺では灌漑農耕による塩害が進行していた可能性がある。一方、ヨルダンの乾燥地帯に立地する新石器時代遺跡での研究などから、遊牧の開始過程について明らかにすることができた。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡における遊牧民の役割について動植物遺存体のみから明らかにすることは難しいが、遊牧民との交渉や交易といった戦略は、集約的な農耕と牧畜の弊害を補完する方法のひとつとしても有効であったと推定される。

計画研究「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」

岡田保良

1. 研究組織

研究代表者

岡田保良（国士舘大学イラク古代文化研究所）

研究分担者・連携研究者

深見奈緒子（早稲田大学）

新井勇治（愛知産業大学）

辻村純代（国士舘大学）

山内和也（国立東京文化財研究所）

吉武隆一（熊本大学）

研究協力者

岩出まゆ（国立東京文化財研究所、2005年当時）

2. 研究の目的

ユーフラテス中流域を中心としつつ広くイラン西部から地中海東沿岸に至る西アジア一帯の空間を「横軸」に、歴史的には遠く先史の時代から古代の諸文明を経てイスラームの文化が浸透するまでの連続的な時間を「縦軸」に見立てながら、「組積造」と総称される建築構法をファクターとして織り込むことにより、古代西アジアの建築を技術の系譜として捉えなおすこと。

3. 研究の方法

- ・調査地域：広くイラン西部から地中海東沿岸に至る西アジア一帯。シリアのほか、レバノン、ヨルダン、イランで調査を実施。
- ・対象年代：新石器時代から古代の諸文明を経てイスラームの文化が浸透するまで。
- ・調査項目：石造・煉瓦造という「組積造」に視点を絞り、とくに上部架構に着目し、略測と写真により組積の特徴を記録する。
- ・上記の枠組みで組積法の分類と編年を行い、各時代におけるセム系地域の建築技術を、その地域内のバリエーションの様相を明らかにするとともに、イラン系建築との比較を試みる。

4. 研究概要 2005-2009

第1年度レバノン調査

Dec. 27, 2005 to Jan. 07, 2006：岡田、深見、新井

第2年度ヨルダン調査

Jul. 23, 2006 to Aug. 9, 2007

：岡田、深見、新井、辻村、吉武、岩出

第2年度シリア調査（岡田のみ）

Feb. 27, 2007 to Mar. 09, 2007

第3年度シリア調査

Aug. 23, 2007 to Sep. 11, 2007

：岡田・深見・新井・辻村・吉武

第4年度イラン調査

Aug. 25, 2008 to Sep. 05, 2008：岡田・深見

第4年度シリア調査

Oct. 31, 2008 to Nov. 2008：岡田・吉武

第5年度シリア調査

Dec. 23, 2009 to Dec. 31, 2009

：岡田・深見・辻村・吉武

5. 主たる研究成果

- － 1. シリア・パレスティナ地域の建築組積の特徴と類型化
 - ・レバノンのビブロス、アシュムンの両遺跡のフェニキア時代以降、古代西アジアの支配民族変遷と建築組積技術との関連性を確認。
 - ・ヨルダンにおける新石器文化からローマ時代に至るまでの石造技術の先進性。
 - ・シリア、ガーネム・アル・アリ遺跡に見る煉瓦・石材併用から近現代クッバ住居への移行の問題。ヘレニズム以降の切石組積の伝統。
- － 2. イラン系建築組積の特徴とその広がり
 - ・レバノンのアケメネス朝期と伝える巨石組積とファールス地方同時代組積との類似。
 - ・ラッカ近郊ヘラクラ遺跡に見るサーサーン朝の石造遺構。
- － 3. 西アジアのドーム組積術の多様性
 - ・ローマ時代以前の輪積み煉瓦ドームの系譜。

- ・ローマ系の切石造ペンデンティヴ型ドーム。
- ・サーサーン朝に見る大型ドームとローマ系ドームとの影響関係。

6. 特定領域研究への寄与

- 1. セム系部族社会が伝える建築術
 - ・日乾煉瓦の系譜上にクッバ住居
 - ・ローマの影響下に成立のペンデンティヴ型ドームほか切石造曲版構造
- 2. イラン系建築文化との交流と対比

計画研究「オアシス都市パルミラにおける ビシュリ山系セム系部族文化の基層構造と再編」

宮下佐江子

1. 研究組織

研究代表者

宮下佐江子（古代オリエント博物館）

研究分担者

津村眞輝子（古代オリエント博物館）

連携研究者

西藤清秀（檀原考古学研究所）

2. 研究の目的

本研究は、紀元後1 - 3世紀のオアシス都市パルミラの基層構造であるセム系社会の文化が、地中海世界や東方文化と出会うことによってどのように変容したか、あるいは再編していったかを明らかにしようとするものである。

ビシュリ山系南西に位置するパルミラの歴史は古く、シリア砂漠の中にあって、水資源の豊富なこの土地は遊牧民や隊商が利用し続け、永くセム系社会の一員としてその歴史を育んできた。しかし、ヘレニズム以降、その様相は大きく転換する。町の名前は元来「タドモル」であったが、アレクサンドロスの東征に伴って移住してきたギリシア人によって「棗椰子のまち」を意味する「パルミラ」と呼ばれるようになった。やがて、シリアがローマ帝国の属州になると、東西交易の要衝の地として大いに栄え、それは272年にローマによって陥落されるまで続いたのである。列柱道、劇場、神殿などのローマ様式の建造物が多数残り、パルミラに特徴的な地下墓・家屋墓からは様々な文化の影響を受けた肖像彫刻や副葬品が多く出土している。

本研究はこのパルミラというオアシス都市を「セム系部族社会」が成立した数千年後の例として注目した。なかでも様々な文化が流入するローマ時代に軸足をおき、異文化の受容と伝統文化の変容がどのように行われ、セム系部族文化の痕跡はどのように残っているのかを具体的に検証することを試みた。

3. 研究の方法

研究代表者および分担者はそれぞれの専門分野において研究を実施し、パルミラの文化形成や社会の構造を多角的に研究した。

研究代表者・宮下佐江子はパルミラの出土遺物の美術史的研究を担当した。当時のパルミラ社会には様々な民族が共生していたことは墓に残された名前の系統研究から知られるが、美術作品からも周辺諸文化の伝統や当時の最新流行を取り入れた例を見ることができる。分担者・津村眞輝子は周辺の同時代遺跡との比較研究を担当する。特にコインに焦点をあて、ローマ帝政期におけるパルミラおよびその周辺遺跡のコイン出土例の分析調査を進めた。

連携研究者・西藤清秀は1990年からパルミラの墓の発掘を実施しており、考古学的立場からパルミラの葬制を研究した。

4. 2005 - 2009 年度の研究概要

宮下および西藤は現地シリア・パルミラの発掘調査を通して研究を進めた。宮下はパルミラ遺跡出土遺物の研究を通して、パルミラ文化の伝播と変容を追い、その広がりや各地域の独自性について考察した。西藤はパルミラの地下墓の形態や副葬品に主眼を置き、パルミラの葬制の変遷を追った。また現地の民族調査を実施することで、約2000年前のパルミラの伝統文化が現代社会に残存している例を見いだした。このように文化の伝統が数千年にわたって受け継がれていく例は、パルミラ最盛期の文化の中にも、それ以前の痕跡を見いだすことが可能であることを示唆している。津村は、文献および国内外所蔵のコイン資料を中心に比較調査研究を実施した。

5. 主たる研究成果

パルミラはローマ帝国の属州として、大幅な自治権は認められていたものの、政治制度や税制はローマに準拠していたと思われる。しかし、市民の社会生活には伝統的な文化が色濃く残存していたことが、墓

室内彫刻や葬制の事例から明らかになった。コインの流通に関してはパルミラ独自の特性はむしろ検出されず、周辺領域の出土状態や流通についての検証がより重要であるという展望を持つに至った。

6. 「セム系部族社会の形成」研究への寄与

当研究班は「セム系部族社会」形成後を研究範囲とし、セム系部族社会が形成された後、その伝統を基盤とするオアシス都市パルミラが外来の文化をどのように受容したかを考察した。これは、セム系部族社会の文化形成のその後の展開の一例を提起するものである。

公募研究「人類学・歴史学によるアラブ系部族組織再考」

赤堀雅幸

1. 研究組織

研究代表者

赤堀雅幸（上智大学外国語学部教授：人類学）

研究分担者

黒木英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授：歴史学）

連携研究者

錦田愛子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究員：地域研究）

研究協力者

高尾賢一郎（同志社大学大学院神学研究科博士課程（後期課程）：地域研究）

森山央朗（日本学術振興会特別研究員（PD）：歴史学）

2. 研究目的

研究代表者、研究分担者等のシリア他の中東地域に関するこれまでの現地調査とその成果をさらに発展させ、従来の部族に関する人類学、歴史学の研究をふまえて、「部族」概念について整理を行い、その上で考古学、人類学、歴史学など諸々の分野にまたがって通用させることが可能な「部族」概念を作り出すべく理論的洗練を行うことを本研究の目的とした。

3. 研究方法

人類学と歴史学の二つの分野を中心に、地域研究者の視点を組み込みつつ、次の3点を問題意識として共有し、文献の精査と現地調査によって「部族」概念のより明確な規定について議論を深めた。

- ①父系出自を基盤とするアラブ系「部族」の原理的一貫性
- ②原理の様々な形での活用によるアラブ系「部族」の形態的柔軟性（地域による多様なあり方と、時代による多様なあり方の双方を含む）
- ③部族が機能する現実の場における組織的側面とネットワーク的側面の相補性

4. 研究概要

計画の細部を策定後、分担を定めて資料収集と分析

を開始し、国内での購入の他、また調査の機会を利用して現地での収集を実施した。現地調査は、本特定領域研究の第7次および第8次調査にあわせて2度の現地調査、またそれ以外にモンゴルおよびレバノンにおいて比較対照調査を実施した。詳細は下記の通りである。

- ①資料収集：21点の国内未所蔵書を購入、上智大学アジア文化研究所所蔵とした
- ②現地調査：シリア（平成20年10月、平成21年3月）、モンゴル（9月）、レバノン（9月）
- ③研究会：11月、平成21年3月
- ④成果公刊：特定領域開催のシンポジウム、発行の報告等の他、独自の成果刊行を準備中

5. 研究成果

今日にいたるまで地域的まとまりをみせる歴史的シリアを主要な対象として、比較対照する地域を設けながら研究を展開することで、領域研究全体の試みに、人類学と歴史学の方面から応え、領域の総合性を高めるよう努めた。

以下の2点がとくに重要な知見として得られた。

- ①過去の歴史、現在の集団区分、資源分配を一貫して父系出自に基づいて統御するアラブ系遊牧民部族組織がきわめて特殊であること
- ②19～20世紀に定住化した元遊牧民を対象としたビシュリ山系における現地調査からは、遊牧民の定住化が農耕地帯の拡大の過程でもあり、そうして外へと広がっていく農耕地帯外延部で遊牧民と農耕民の交流がなされており、そこでは定着遊牧民が両者を媒介する役割を果たしていること

6. 領域への貢献

本公募研究がイスラーム期以降の部族のあり方について指摘でき、領域研究の全体に反映しうると思われるのは、下記の諸点である。

- ①言語集団、民族集団、社会進化の段階等ではなく、政治組織として部族を理解する必要があること
- ②部族は遊牧という生業形態と強く結びついているが、部族内での生業複合もみられること

- ③父系出自による部族の統合は一般的だが、実際の凝集の論理と機構は多様であること
- ④中東において、部族と国家は常に共存しており、両者は同じ地域で機能する二つの異なるガバナンスの形態であること
- ⑤遊牧民と農耕民との交流は恒常的で、とくに遊牧民に必要とされており、両者を媒介する役割をしばしば定着遊牧民が果たしていること

これら諸点を考慮するならば、本特定領域研究の全体において「マルトゥ」「アモリ」などの固有名を持って呼ばれる集団は、今日の中東の人類学や歴史学が用

いる意味での「部族」ではなく、「民族」と呼ぶことが適切である。同時に、それら民族が遊牧を主たる生業としていたのであれば、個々の民族集団は離合集散しやすいいくつかの部族から構成されていたと考えることは不自然ではない。どのように、またどの程度の政治的凝集力を個々の部族が発揮したのかはおそらくかなりのばらつきがある。生業複合の可能性も視野に入れるならば「セム系部族社会」というときの「部族社会」は一様ではなく、何をその共通の特性と見るかについては、領域研究の総括にあたって改めて議論が必要である。

事務局だより

ニューズレター本号は最終総括号です。過去 5 年間の研究を振り返るとき、シリア調査現地の厳しい暑さ、寒さの中で苦闘した仲間の様子が思い出されます。とりわけ、希望をもって本研究に参加されていたにもかかわらず、若くしてこの世を去ってしまった木内智康氏の姿が目には浮かびます。

諸般の事情からなかなか軌道に乗らなかった本研究も、今年の 11 月に開催した国際シンポジウムでは海外の先学から高い評価を受けました。

そして、この 2 月 4 日に開催した外部評価においては、藤本強、稲田孝司、マイケル・ローフの 3 先生から高い評価を受けました。

本研究を本格的に発展させる必要性を感じています。

5 年間にわたって培った協力姿勢を今後も持ち続けたいと思います。

(大沼克彦)

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.18 2010年 2 月 20 日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
代表 大沼克彦

編集：総括班（大沼克彦・藤井純夫・西秋良宏・常木 晃・宮下佐江子・佐藤宏之）
事務局：〒 195-8550 東京都町田市広袴 1-1-1 国士館大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html

